

(イ) 注目される植物群落及び注目される理由

調査地域に分布する植物群落について、表 10.7-8 の選定基準に基づき、注目される植物群落の選定を行いました。その結果、注目される植物群落は選定されませんでした。

表 10.7-8 注目される植物群落の選定基準

No.	選定基準	
1	文化財保護法に基づく、国、東京都及び多摩市、稲城市の天然記念物・特別天然記念物	<ul style="list-style-type: none"> ・天然記念物 ・特別天然記念物 ・天然記念物
2	「日本の重要な植物群落Ⅱ 南関東版」(昭和 63 年 8 月 環境庁)の特定植物群落及び追跡調査である第 3 回・第 5 回自然環境保全調査において指定されている特定植物群落	特定植物群落 <ul style="list-style-type: none"> ・原生林又はそれに近い自然林 ・国内若干地域に分布するが、極めて稀な植物群落又は個体群記号 ・比較的普通に見られるものであっても、南限、北限、隔離分布等分布限界になる産地に見られる植物群落又は個体群 ・砂丘、断崖地、塩沼地、湖沼、河川、湿地、高山、石灰岩地等の特殊な立地に特有な植物群落又は個体群で、その群落の特徴が典型的なもの ・郷土景観を代表する植物群落で、特にその群落の特徴が典型的なもの ・過去において人工的に植栽されたことが明らかな森林であっても、長期にわたって伐採等の手が入っていないもの ・乱獲その他人為の影響によって、当該都道府県で極端に少なくなるおそれのある植物群落又は個体群 ・その他、学術上重要な植物群落又は個体群
3	「植物群落レッドデータ・ブック」(平成 8 年 4 月 公益財団法人日本自然保護協会・公益財団法人世界自然保護基金日本委員会)に掲載の植物群落	保護・保全の対策を立てる必要がある植物群落 <ul style="list-style-type: none"> ・緊急に対策が必要〔緊急に対策を講じなければ群落が壊滅する〕 ・対策必要〔対策を講じなければ群落の状態が徐々に悪化する〕 ・破壊の危惧〔現在は保護対策が功を奏しているが、将来は破壊の危惧が大きい〕 ・要注意〔当面、新たな保護対策は必要ない(監視必要)〕

②水生動物

i 両生類

(7) 両生類相

既存資料調査の結果、調査地域で、表 10.7-9 に示す 1 目 3 科 3 種の両生類が確認されました。

表 10.7-9 確認された両生類の一覧

No.	目名	科名	種名(和名)
1	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル
2		アカガエル	ヤマアカガエル
3		アオガエル	シュレーゲルアオガエル
合計 : 1 目 3 科 3 種			

注) 種の配列等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 平成 28 年度生物リスト」(平成 28 年 9 月 国土交通省)に準拠しました。

(4) 注目される両生類及び注目される理由

既存資料調査結果より、表 10.7-12 の選定基準に基づいて、注目される両生類の選定を行いました。

その結果、注目される両生類は表 10.7-10 に示す 1 目 3 科 3 種が選定されました。

これらの種の生息状況等は表 10.7-11 に示すとおりです。

なお、これらの種の確認位置は、注目される種の保護のため、図示していません。

表 10.7-10 注目される両生類の選定結果

No.	目名	科名	種名(和名)	選定基準 ^{注)}			
				1	2	3	4
1	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル				VU
2		アカガエル	ヤマアカガエル				EN
3		アオガエル	シュレーゲルアオガエル				VU
合計 : 1 目 3 科 3 種				0 種	0 種	0 種	3 種

注) 選定基準は表 10.7-12 参照

表 10.7-11 注目される両生類の生息状況

種名(和名)	生息状況
ニホンアマガエル	湿地で鳴き声や個体が確認されました。
ヤマアカガエル	聞き取り調査によると過去に、湿地の旧水田で卵塊が確認されました。
シュレーゲルアオガエル	湿地の旧水田の畦畔より鳴き声の確認されました。

資料 : 「平成 25 年度多摩連光寺自然環境調査委託報告書」(平成 26 年 3 月 東京都環境局)

表 10.7-12 注目される動物の選定基準

No.	選定基準
1	文化財保護法に基づく国、東京都及び多摩市、稲城市の天然記念物・特別天然記念物 天然記念物 ・特別天然記念物(特天) ・天然記念物(天)
2	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律 における国内希少野生動植物種・国際希少野生動植物種 指定種 ・国内希少野生動植物種(国内) ・国外希少野生動植物種(国際)
3	「環境省レッドリスト 2018」(平成 30 年 5 月 環境省)の掲載種 選定種 ・絶滅危惧 I 類(CR+EN):絶滅の危機に瀕している種 ・絶滅危惧 I A 類(CR):ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種 ・絶滅危惧 I B 類(EN): I A 類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種 ・絶滅危惧 II 類(VU):絶滅の危険が増大している種 ・準絶滅危惧(NT):現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する要素のある種 ・情報不足(DD):評価するだけの情報が不足している種 ・絶滅のおそれのある個体群(LP):地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの
4	「レッドデータブック東京 2013～東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)解説版～」 (平成 25 年 5 月 東京都)の掲載種 ・両生類、魚類:「南多摩」のランク ・昆虫類、底生動物(昆虫類、甲殻類、貝類)、貝類:「南多摩」及び「本土部」のランク 選定種 ・絶滅危惧 I 類(CR+EN):絶滅の危機に瀕している種 ・絶滅危惧 I A 類(CR):ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの ・絶滅危惧 I B 類(EN): I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの ・絶滅危惧 II 類(VU):現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの ・準絶滅危惧(NT):現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの ・情報不足(DD):環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていないもの ・留意種(留):現時点では絶滅のおそれはないと判断されるため、上記カテゴリーには該当しないものの、次の①～⑧の選定理由のいずれかに該当し、留意が必要と考えられるもの ①準絶滅危惧(NT)に準ずる(現時点では絶滅のおそれはないが、生息環境が減少していることから動向に留意する必要がある)/②過去の環境改変により、生息地が限定されていたり、孤立個体群がある/③人為的な環境配慮により個体群が維持されている/④外来種の影響に注意する必要がある/⑤生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている/⑥自然の回復状況をあらわしている/⑦良好な環境の指標となる/⑧タイプロカリティ(基準産地、模式産地)

ii 魚類

(7) 魚類相

既存資料調査の結果、表 10.7-13 に示す 1 目 1 科 1 種の魚類、ホトケドジョウが確認されました。

表 10.7-13 確認された魚類の一覧

No.	目名	科名	種名(和名)
1	コイ	ドジョウ	ホトケドジョウ
合 計 : 1 目 1 科 1 種			

注) 種の配列等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 平成 28 年度生物リスト」(平成 28 年 9 月 国土交通省)に準拠しました。

(イ) 注目される魚類及び注目される理由

既存資料調査結果より、表 10.7-12 に示す選定基準に基づいて注目される魚類の選定を行いました。

その結果、注目される魚類として表 10.7-14 に示すホトケドジョウの 1 目 1 科 1 種が選定されました。

この種の生息状況等は表 10.7-15 に示すとおりです。

なお、本種の確認位置は、注目される種の保護のため、図示していません。

表 10.7-14 注目される魚類の選定結果

No.	目名	科名	種名(和名)	選定基準 ^{注)}			
				1	2	3	4
1	コイ	ドジョウ	ホトケドジョウ			EN	VU
合 計 : 1 目 1 科 1 種				0 種	0 種	1 種	1 種

注) 選定基準は表 10.7-12 参照

表 10.7-15 注目される魚類の生息状況

種名(和名)	生息状況
ホトケドジョウ	成魚は湿地の水路や水域で広く確認されています。稚魚は湿地の雨水等の流入孔付近や旧水田、水路途中の湧出点など、日当たりの良い場所で多く確認されています。

資料：「平成 25 年度多摩連光寺自然環境調査委託報告書」(平成 26 年 3 月 東京都環境局)

iii 底生動物

(7) 底生動物相

既存資料調査の結果、表 10.7-16 に示す 6 綱 14 目 23 科 36 種の底生動物が確認されました。

表 10.7-16 確認された底生動物の一覧

No.	綱名	目名	科名	種名(和名)	
1	渦虫	三岐腸	サンカクアタマウズムシ	ナミウズムシ	
2	腹足	盤足	カワニナ	カワニナ	
3			カワコザラガイ	カワコザラガイ	
4			モノアラガイ	ハブタエモノアラガイ	
5	二枚貝	マルスダレガイ	マメシジミ	マメシジミ属	
6	ミミズ	イトミミズ	ミズミミズ	エラミミズ	
7				ミズミミズ属	
8				イトミミズ亜科	
9	軟甲	ワラジムシ	ミズムシ	ミズムシ	
10		エビ	サワガニ	サワガニ	
11	昆虫	トンボ	サナエトンボ	ヤマサナエ	
12			オニヤンマ	オニヤンマ	
13			トンボ	シオカラトンボ	
14				オオシオカラトンボ	
15		カワゲラ	オナシカワゲラ	オナシカワゲラ属	
16		カメムシ	アメンボ	ヒメアメンボ	
17				ヤスマツアメンボ	
18				シマアメンボ	
19				カタビロアメンボ	ケシカタビロアメンボ亜科
20		ヘビトンボ	ヘビトンボ	ヤマトクロスジヘビトンボ	
21		トビケラ	カクツツトビケラ	カクツツトビケラ属	
22		ハエ	ガガンボ	カスリヒメガガンボ属	
-					ヒメガガンボ亜科 [※]
23			ヌカカ	ヌカカ科	
24			ユスリカ	ユスリカ	ユスリカ属
25					カマガタユスリカ属
26					ボカシヌマユスリカ属
27					ナガスネユスリカ属
28					ニセケバネエリユスリカ属
29	Paratrissocladius sp.				
30	ハモンユスリカ属				
31	ナガレユスリカ属				
32	ピロウドエリユスリカ属				
-					ユスリカ亜科 [※]
-					エリユスリカ亜科 [※]
-					モンユスリカ亜科 [※]
33	ホソカ		ホソカ属		
34	ブユ		ツノマユブユ属		
35	ナガレアブ	サツモンナガレアブ			
36	コウチュウ	ガムシ	セマルガムシ		
合 計 : 6 綱 14 目 23 科 36 種					

注) 種の配列等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 平成 28 年度生物リスト」(平成 28 年 9 月 国土交通省)に準拠しました。

※) 同一の種が同じ科の中に含まれている可能性があるため、合計種数に計測していないことを示します。

(イ) 注目される底生動物及び注目される理由

既存資料調査結果より、表 10.7-12 に示す選定基準に基づいて注目される底生動物の選定を行いました。

その結果、注目される底生動物として、表 10.7-17 に示す 3 綱 3 目 3 科 3 種が選定されました。これらの種の生息状況等は表 10.7-18 に示すとおりです。

なお、これらの種の確認位置は、注目される種の保護のため、図示していません。

表 10.7-17 注目される底生動物の選定結果

No.	綱名	目名	科名	種名(和名)	選定基準 ^{注)}				
					1	2	3	4	
								南多摩	本土部
1	二枚貝	マルスダレガイ	マメシジミ	マメシジミ属				DD	DD
2	軟甲	エビ	サワガニ	サワガニ				留	留
3	昆虫	トンボ	サナエトンボ	ヤマサナエ				VU	EN
合 計 : 3 綱 3 目 3 科 3 種					0 種	0 種	0 種	3 種	3 種
					3 種				

注) 選定基準は表 10.7-12 参照

表 10.7-18 注目される底生動物の生息状況

種名(和名)	生育状況等
マメシジミ属	湿地の北側(宅地側)の水路内で確認されています。
サワガニ	湿地の水路内と水路沿いの場所で確認されています。
ヤマサナエ	湿地の西部の水路内で確認されています。

資料: 「平成 25 年度多摩連光寺自然環境調査委託報告書」(平成 26 年 3 月 東京都環境局)

iv 貝類（陸産貝類・淡水産貝類）

(ア) 貝類相

調査地域では、表 10.7-19 に示す 3 目 9 科 16 種の貝類が確認されました。

表 10.7-19 確認された貝類の一覧

No.	目名	科名	種名(和名)	
1	磐足	カワニナ	カワニナ	
2	基眼	ケシガイ	ニホンケシガイ	
3		モノアラガイ	コシダカヒメモノアラガイ	
4			ハブタエモノアラガイ	
5		ヒラマキガイ	ミズコハクガイ	
6	柄眼	キバサナギガイ	ナタネキバサナギガイ	
7			キバサナギガイ	
-			キバサナギガイ属*	
8		パツラマイマイ	パツラマイマイ	
9		ナメクジ	ナメクジ	
10			ナメクジ属	
11		ノコウラナメクジ	ノハラナメクジ	
12		ベッコウマイマイ		ヒメベッコウガイ
13				ハリマキビ
14				マルシタラガイ
15	カサキビ			
16	ウラジロベッコウ			
合 計			: 3 目 9 科 16 種	

注) 種の配列等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 平成 28 年度生物リスト」(平成 28 年 9 月 国土交通省)に準拠しました。

※) 同一の種が同じ科の中に含まれている可能性があるため、合計種数に計測していないことを示します。

(イ) 注目される貝類及び注目される理由

既存資料調査結果より、表 10.7-12 に示す選定基準に基づいて注目される貝類の選定を行いました。

その結果、注目される貝類として、表 10.7-20 に示す 2 目 3 科 4 種が選定されました。これらの種の生息状況等は表 10.7-21 に示すとおりです。

なお、これらの種の確認位置は、注目される種の保護のため、図示していません。

表 10.7-20 注目される貝類の選定結果

No.	目名	科名	種名(和名)	選定基準 ^{注)}					
				1	2	3	4		
							南多摩	本土部	
1	基眼	モノアラガイ	コシダカヒメモノアラガイ			DD			
2		ヒラマキガイ	ミズコハクガイ			VU	CR+EN	CR+EN	
3	柄眼	キバサナギガイ	ナタネキバサナギガイ			VU	VU	VU	
4			キバサナギガイ			CR+EN	CR+EN	CR+EN	
合 計				: 2 目 3 科 4 種	0 種	0 種	4 種	3 種	3 種
								3 種	

注) 選定基準は表 10.7-12 参照

表 10.7-21 注目される貝類の生息状況

種名(和名)	生息状況
コシダカヒメモノ アラガイ	湿地のヨシ群落の縁の1箇所が生貝が確認されています。
ミズコハクガイ	湿地の8箇所を確認されています。確認地点は枯葉などが折り重なった湿地状の環境が主で、半分水に浸かって水分を十分に含んだ枯葉の上に着生する個体などが確認されています。
ナタネキバサナギ ガイ	湿地の西部の4箇所を確認されており、うち3箇所が生貝が確認されています。確認地点はガマやヨシが高密度で生育する湿地が主で、ガマやヨシの根元や湿地表面の枯葉の上などに着生する個体などが確認されています。
キバサナギガイ	湿地の中央部西の3箇所が生貝が確認されています。確認地点はガマやヨシが高密度で生育する湿地が主で、ガマやヨシの根元付近に着生する個体などが確認されています。

注)資料「平成25年度多摩連光寺自然環境調査委託報告書」(平成26年3月 東京都環境局)

b 生息(育)環境

①地形、地下水等の状況

i 地形

調査地域及びその周辺における地形の状況は、図10.7-3に示すとおりです。

調査地域は、丘陵地の谷戸に位置する湿地です。湿地周りの地形は、主に落葉広葉樹林から成る斜面地形が北東から南西にかけて形成されており、北側から西側にかけての範囲には住宅地や農地として利用されている比較的平坦な地形となっています。湿地の標高は周辺より低くなっているため、地形の標高に基づき集水域を設定すると、湿地を囲むような形となります。

ii 地下水等

調査地域及びその周辺における集水域と流入・流出等の状況は、図10.7-3に示すとおりです。

【A案】(既定都市計画案)の計画路線は、調査地域である湿地の真下をトンネルで通過しています。【B案】(南側変更案)の計画路線は、この湿地から南側へ約40m以上離れた位置の地下をトンネルで通過します。

湿地の水環境は、主に共同井戸からの流入と湿地周辺からの湧水により支えられています。

湿地の南西には自噴井戸である共同井戸があり、そこからの地下水は雨水管(暗渠)を自然流下して湿地に常時流入しています。また、湿地周辺には湧水が5箇所確認されており、井戸以外にも一定量の湧水が湿地に流入し、湿地の維持に寄与しています。

湿地に流入した水は、緩やかに北東方向へ流下し、湿地北東部の2箇所から暗渠により湿地外へ流出しています。

共同井戸や湿地周辺の湧水は、集水域に降った雨が浅い地層(盛土・埋土層、沖積層、新期ローム層)に浸透し、その下位に分布する難透水性の古期ローム層の上に集積流下した地下水が湧出しているものと考えられます(「10.6水循環」219ページ参照)。

また、湿地周辺の地下水位は、出店層の調査箇所(W2(Ddg1)、W3(Ddg1))において、A.P.135m

前後を推移しており、湿地レベル(約 A. P. 133m)よりも高い水位が確認されています(図 10. 6-2 (1) (214 ページ)、図 10. 4-4 (185 ページ) 参照)。

なお、地下水の水質分析の結果、トンネルが主に通過する稲城層と、その上位に分布する出店層の地下水は直接的には連動していないと考えられます。(図 10. 6-7 (221 ページ) 参照)